

川氏は我國多くの労働運動者がマルクス主義の信者なる時、獨り宗教的思想に立脚せる人格主義を説き、階級闘争主義を排して普遍的の民主主義を鼓吹し來れり。賀川氏に依れば民衆運動の眞の方向は民衆が産業的に充分享樂し得る自主自立の組織即ち産業民主にあらざるべからず。其の爲には社會的結合の自由が政治的に認めらるゝと共に産業的にも保留せられざるべからず。氏は此の點に於て中央集權のなるマルクス主義に反對して、中世紀の宗教結社を中心として發達せるギルド組織に賛成せるものなる旨を言明せり。氏が單一の組合を以て民衆と工場とを壓制する事に反對し、所謂工場占有主義に反對せるも、各人が自由に結社し得る事を熱望せし結果なり。(労働者新聞第二十一號産業民主の方)氏が普選運動に賛し、漸進的なる組合組織に賛せるは産業民主への第一歩なりと思考せるの結果に外ならずして窮極に於ては現制度を更改して社會組織を根本的に改造するにある事に於ては多くの労働運動者と一致せり。然れ共其方法は飽迄産業民主に依らざるべからずと主張し工場經營に關しても現在の株主專制主義を排して、被治者即ち労働者の民本主義の立憲統治を要求せり。(労働者新聞第一號工場民主)賀川氏が工場管理を美しき幻影として多年描き來れるも全く人間相互愛の觀念より出發せるものにして茲に夢想家としての氏の面目躍如たるものあり。

今回の工場管理の宣言の如きも、我國數多の争議が指導者の思想の反映として其の策戦上に現れたる態様を種々にする事を思へば、上述の如き賀川氏思想の感化を受けたる労働者が當然爲すべく想像せらるゝ事ならずんばあらず。彼等は賀川氏に撫育せられて等しく夢想家となり、其の平生曉望しつつありし産業立憲の理想を直ちに實現せんとせしものにして、彼等はその爲す所が工場占領の如き奪略的行爲に非ざるが故に何等不合理なしと過信せるものゝ如し。然れ共此の計畫に對しては單に賀川氏及び其の一派の幹部のみ賛成するに止まり友愛會としては之に對し寧ろ甚だしく慊らざりしものありしが如く、之を以て友愛會全體の主張の如く思惟するは不當なりと云はざるべからず。

合法的行爲なりと確信して工場管理を斷行せるにも拘らず、之が反響は甚だしく惡評に滿ち宛かもサンデカリストの行爲の如く一般社會より誤認せられ、官憲よりは愈々辛辣なる取締方針を以て壓迫せらるゝに至りしより、賀川氏は一般の誤解を防ぐ爲め左の如き文書を草し十八日之を發表せり。

工場管理論

ストライキや、サボタージュやボイコットは労働者解放の道程に於ては余りに消極的であり國家の産業を萎縮せしめ曳いては労働者そのものをも枯衰せしめる危険がある。

それで労働階級の根本的衝動は産業管理の方向に向ふのである。産業管理は暴力による工場占領では無い。一産業に従事する全労働者の合意的決意になる建設的企圖である。消極的ストライキや怠業は非常に容易である。然し全産業の労働者が完全なる團結の下に積極的の勞作に従事することは實に至難なことである。然し労働階級の全人意義が此處まで自覺して來なければ眞の労働運動と云ふことは出来ないのである。

我等は大正十年七月の川崎造船所争議に於てこの最も至難とする積極政策を取ることをしたのである。之は所謂重役なるものが色々な口實を求めて誠意ある回答をなさず労働階級の自覺を蹂躪し労働者一萬七千の意志のあるところを無視し組合の自由と工場